能楽対談　四九〇回

先人に導かれ、福山の地で

大島　政允
三浦　裕子

修業時代

三浦　修業に入られた頃のお話からおうかがいしたいと思います。

大島　昭和三十三年に地元の福山（広島県）の中学を卒業して上京し、喜多実先生の内弟子として修業を始めました。新宿の成城高校に通いながらでした。

三浦　成城高校は喜多流の方がよく通われた学校ですね。校長先生がご理解のある方だったと聞きました。

大島　そうです。僕は友枝昭世さんの卒業と入れ代わる形で入学しました。お狂言の山本則俊君が同級生で、香川靖嗣君や塩津哲生君とは一緒に通学しました。香川君は小学校を出てすぐに実先生に入門したので、僕より二つ年下なのですけれども、彼の方が一年早く修業を始めました。

僕のあとには順不同ですが、金子匡一、塩津哲生、狩野秀生（現・琇鵬）、松井彬、出雲康雅、大村定、笠井陸君らが次々に入門してきまして、練馬にあった実先生のご自宅には住み込みの内弟子が常時十人ぐらいいましたから、先生の奥様はさぞかし大変だったのじゃないかと思います。とにかく賑やかで、毎日が修学旅行のようでした（笑）。

三浦　中学を卒業してすぐに内弟子に入られたわけですね。相当な覚悟をなさったのではありませんか。

大島　そういう決まりだと思っていましたから、それほどの覚悟ではなくレールに乗る感じでしたね。

三浦　実先生のお稽古は大変に厳しかったのではないですか。

大島　辛いとは全然思いませんでしたけれど、先生のパワーはすごかったですね。毎朝早く我々に地謡を謡わせて、能一番ご自身が舞われていました。稽古が本当にお好きだったのでしょう。

三浦　朝のお稽古は何時から始まったのですか。

大島　七時ぐらいからでしたが、ご近所から「朝早くはうるさいので止めてくれ」とクレームがつきまして、これがきっかけで早朝の稽古が中止になりました（笑）。

三浦　お稽古の内容はどのようなものだったのですか。

大島　謡と任舞で、入門したての頃は謡の稽古が中心で、能一番を通して稽古していただきました。

三浦　夜、寝る前にもお稽古があったのですか。

大島　いえ、夜はご自分だけでなさっておられましたね。とにかくお稽古熱心な先生でした。

三浦　内弟子を卒業されたのはいつ頃でしたか。

大島　十年ちょっと実先生の許におりまして、そのあとは住み込みとして目黒の能楽堂に移りました。

独立記念として「道成寺」を披いたのが昭和四十六年。福山の舞台披きの時でした。

その後五年程、東京におりましたが、昭和五十一年の夏、福山に帰りました。福山の舞台の維持発展という目的がありましたし、父も帰ってこいと言うもので、決心しました。

三浦　「道成寺」のほかにもいろいろな曲を披いておられますね。喜多流では「猩々乱」や「石橋」をいつ頃披くのでしょうか。

大島　最初は「猩々乱」で次が「翁」になりまして、それから「道成寺」。また、「石橋」のツレ（赤）、「望月」などをいたしますね。

三浦　これらを喜多会で披かれたのでしょうか。

大島　私の場合はほとんど福山で舞いました。

三浦　そろそろ老女物を舞われる時期をお迎えなのではありませんか。

大島　年齢的にはそろそろなのでしょうが（笑）。再来年ぐらいには「卒都婆小町」を舞わせていただこうかなと考えております。

三浦　一時期、果水会のメンバーでいらしたのですね。

大島　果水会には三年ぐらい在籍しましたが、福山に戻ることになってやめました。その前には青年喜多会に所属していました。

初めて公開の場で能を舞わせていただいたのが青年喜多会でした。

三浦　曲目は何でしたか。

大島　「花月」です。装束をつけた稽古能というのが年に三、四回ありまして、これは非公開でした。そこで「経政」を舞ったのが、本当の意味での初能です。その前には、装束はつけずに、面だけをつけた稽古能もいたしましたね。その時、実先生が「勢いよく前に出ろ」とおっしゃったので、正面に出ましたらキザハシを踏み越えて舞台から落ちてしまったのです。初めて面をつけたので、歩数だけでは見当がつかなかったんですね（笑）。それはよく覚えています。

三浦　おいくつの時でしたか。

大島　十六歳ぐらいでしたね。

三浦　ところで、初舞台はいつ頃だったのでしょうか。

大島　五歳頃、「鞍馬天狗」の花見の稚児で初舞台を踏みました。次が「望月」「安宅」の子方でした。

三浦　それはすべてお父様がシテだったのですか。

大島　そうです。

三浦　山崎有一郎先生の思い出話をまとめた『昭和能楽黄金期』が一月に出版され、私が聞き手をつとめましたが、大島家から大変貴重な写真を提供していただきました。昭和十三年に実先生や久見先生たちが箱根の三ツ峠にハイキングに行った時のものと、八年の慶応大学学生自演能記念の二点です。ハイキングの写真に対する反響がとても大きかったようです。ありがとうございました。

大島　私と違って父は几帳面な性格で、アルバムには日付も書き込んで整理していましたね。

三浦　政允先生の内弟子時代にも、実先生はリクリエーションに連れていってくださったのですか。

大島　よく連れていってくださいましたよ。箱根や和歌山県の熊野などに、お稽古を離れて旅行しました。

三浦　そういう時も厳格でいらしたのですか（笑）。

大島　（笑）、旅行だけでなく、映画を観ることも許してくださって、いろいろと楽しみを与えてくださいましたね。

三浦　映画はどのようなものをご覧になったのですか。

大島　はっきりと覚えているのは「ペン・ハー」ですね。

三浦　内弟子さんたちで行かれたのですか。

大島　四、五人で出かけたと思いますね。

三浦　「ペン・ハー」とは意外ですね（笑）。

父、大島久見のこと

三浦　お父様の久見先生は、先代の十四世喜多六平太先生に心酔されていらっしゃいましたが、政允先生はお父様と実先生と両方の教えを受けたわけですね。難しいこともあったでしょうが、得るところも大きかったのではないでしょう

大島政允氏：シテ方喜多流職分。日本能楽会会員。国総合指定重要無形文化財。昭和17年、広島生まれ。33年、喜多宗家に入門、十五世喜多実師に師事。「道成寺」「安宅」「石橋」「望月」等、大曲を披く。国内の演能活動のほか、ベルギー、オランダ、ポーランド、ブルガリア、バルト三国、オーストラリア、ベトナム等の海外公演に参加。平成13年、台湾国立芸術学院で客員教授として、一ヶ月の集中講座や薪能公演を行う。14年、新作能「鞆のむろの木」を初演。喜多流能の会・福山喜多会・広島大島会を主宰。

三浦裕子氏：武蔵野大学講師、同大学能楽資料センター研究員。東京芸術大学・国立音楽大学などでも講師をつとめる。著書・共著に『能・狂言の音楽入門』『初めての能・狂言』『面からたどる能楽百一番』『山崎有一郎が語る名人たち　昭和能楽黄金期』など。梅若実日記刊行会編集委員として『梅若実日記』翻刻に携わる。

か。

大島　同じ曲でも、いろいろな演じ方があるものだと感じましたね。

三浦　お父様からは、どの程度習われたのですか。

大島　子供の頃に仕舞や舞囃子をした程度で、本格的な稽古は受けていません。

三浦　お父様は、どちらかというとのんびりとお育てになったのですね。

大島　中学を出たら修業させるつもりだったようですから、まあそうですね。

三浦　内弟子に入られた時点で、実先生とお父様との教え方が違うと思われたことはありますか。

大島　全然感じませんでしたし、実先生に教わっていましたから、その通りにしました。

三浦　現在は能の公演数がかなり増えていますね。

大島　そうですね、昔はこれほど公演数がありませんでしたし、能舞台そのものがなかった。祖父の寿太郎は大正三年、福山に大島能舞台を建てたのですが、戦災で焼失してしまいました。そこで父は昭和二十四年には材木の少ないなかでも舞台を何とか造りまして、先代の六平太先生、実先生、後藤得三先生たちをお招きして、年に一回、演能会を催しておりました。昭和三十三年からは、能楽教室（現・喜多流定例鑑賞能）と命名した定期能を年四、五回催すようになりました。なので、どうしても本格的な舞台を再建したいと思ったのでしょう。昭和四十六年に鉄筋コンクリート三階建てのビルのなかに能楽堂を造りまして、私もそれを引き継いで守っていきたいという気持ちであります。

三浦　平成六年に出版された久見先生の写真集『大島久見傘寿記念・回顧写真集』を拝見すると、それこそ「道成寺」の披キも高校の講堂に仮設した舞台で演じられているのですね。

大島　戦後すぐは、皆さんもそうですけど、舞台がなくて苦労されていますね。

三浦　福山で演能なさることが、政允先生にとってとても大きなお仕事だと思います。福山の喜多流定例鑑賞能は昨年に二百回を迎えましたね。

大島　ちょうど私が上京する中学三年生の時が第一回目でした。当時は公演数が少なかったですから、舞うチャンスを増やす意味と能の普及を目的として、金子匡一君のお父様の金子五郎先生、この方は父より少し先輩でしたが、五郎先生と父の二人で会を始めました。年に四、五回、定期的に催していたのが積もりに積もって、二百回になったのです。

三浦　福山は地方における喜多流の一拠点にもなっていますね。

会を定期的に継続していくというのはいろいろとご苦労がおありかと思います。たとえば番組編成や広報を工夫しなければならないでしょう……。

大島　昔は「費用を抑えろ」ってハガキに番組を書くだけの案内だったりしましたが、現在はそれでは駄目だというのでね（笑）。いろいろと知恵を絞っています。

三浦　チラシも凝っておられますね。

大島　ええ、工夫しています。

三浦　演能前に解説も付けていらっしゃいますね。

大島　父の考えですが、演者が解説をすることで演者自身の勉強にもなりますし、見所の皆様にも親しんでいただけるのではないかと、始めたものです。始めた当時は「解説付き」というのが全国的にも珍しかったと思いますから、そういう面では時代を先取りしていたのではないでしょうか。父はアイディアマンでしたね。

三浦　喫茶室といった付帯設備もありましたね。

大島　ええ。平成十五年に改装した折、「樫木端（かしのきばな）」という展示スペースを設けて、装束・道具類や、能楽関係の本、昔の番組などを置くようにしました。その際、「福山喜多流能楽堂」を「喜多流大島能楽堂」と改称いたしました。

三浦　展示はちょっとしたお客様サービスですね。

大島　はい、楽しんでいただければと思いましてやっております。スペースが限られているのですが、古い番組などに関心を持たれる方もおられますし、新刊本も置いてご自由に読んでいただいています。あなたの本も置いていますよ（笑）。

三浦　ありがとうございます（笑）。

昭和三十年に建てられた目黒の喜多能楽堂が喜多六平太記念能楽堂として竣工するのが昭和四十八年。それより前にお父様も能楽堂を再建なさったのですね。

大島　そうです。

三浦　また、当初は「大島能楽堂」ではなく「福山喜多流能楽堂」と命名されたのもひとつの見識ですね。

大島　喜多流を広めたいという気持ちで、この名称にしたのです。「大島能楽堂」では何だかわかりませんでしょう（笑）。

三浦　本舞台のほかにお稽古舞台もありますね。

大島　一階に敷舞台があり、お弟子さんのお稽古場にも使っています。

三浦　能面・装束をご所蔵とのことですが、お父様が集められたのですか。

大島　はい、戦後に苦労して集めたんです。だいたいの能には対応できるくらい集めてくれましたので、あとの我々は楽です。

三浦　以前ご所蔵の品は戦争で焼けてしまったのでしょうか。

大島　戦争前にどのくらいあったのかわかりませんが、上等なものは少ないですから、追々増やしていけたらと考えています。

演能活動と普及活動

三浦　政允先生は年間に何番くらい能をお舞いになられるのでしょうか。

大島　七、八番というところですかね。

三浦　今年は六月二十五日（日）に喜多流職分会自主公演能で「誓願寺」を、十一月十九日（日）に福山の喜多流定例鑑賞能で「景清」を舞われますね。

大島　はい。福山の定例鑑賞能は年に四回ありますが、そのうち三回はシテを舞っております。「景清」は初演です。実先生、得三先生、友枝喜久夫先生たち諸先輩のお舞台を拝見しておりまして、自分はまだまだと踏ん切りがつかなかったのですけれど、この年になりましたからそろそろしてみようかなと、ようやくその気になったのです（笑）。

三浦　地元では幅広い活動をなさっていらっしゃいますね。たとえば、同じく福山市の鞆（とも）の浦にあります沼名前（ぬなくま）神社能舞台では、演能もなさっているし、普及活動もなさっている。沼名前神社とのご縁はどのようなものなのでしょうか。

大島　沼名前神社能舞台には、明治期に十四世喜多六平太先生も、わたしの曾祖父七太郎や祖父寿太郎も演じた番組絵馬が残っていますし、祖父は大正六年に、新作能「鞆浦」を作って自身で演じています。ここの能舞台は豊臣秀吉が遺愛した移動用の組立舞台で、国の重要文化財にも指定されていまして、ぜひこれを能の普及のために活用したいと考えたのです。

戦後しばらく演能は絶えていたのですけど、平成七年、約八十年ぶりに「鞆浦」を奉納再演することができまして、能楽「鞆浦」の石碑も建てることができました。最近ではお正月に「翁」を奉納しています。また、森田流笛方の帆足正規さんが台本を書いてくださって、私が節付・型付をして「鞆のむろの木」を創作しました。これは『万葉集』にその歌が多く載る大伴旅人をシテにしたもので、平成十四年に東京の国立能楽堂で初演し、十六年には福山の舞台で再演して、去年は沼名前神社能舞台で演能しました。沼名前神社とのご縁がきっかけになってできた新作能ですし、鞆の浦が舞台となっていますから、いわばご当地能ですね（笑）。これで念願が叶いました。

三浦　「翁」の奉納は、毎年、お正月の三日ですか。

大島　ええ、略式なのですけれども三日に演じています。始めた頃は謡だけでしたが、五、六年前から囃子方にもご出演願って装束をつけるようになりました。

三浦　定着してきたということですね。

大島　年々、初詣をかねてお越しくださる方が増えていまして、喜んでいます。能見所もあるのですが、屋外にある舞台ですので、すごく寒いんですよ。

三浦　でも風光明媚なところですし、由緒ある舞台ですので、きっと皆さん喜んでくださいますね。

　お正月以外にも沼名前神社で演能なさることがおありですよね。

大島　昨年、広島県と福山市の観光キャンペーンの一環として、沼名前神社の能舞台で十月に二回、十一月に一回、計三回演能いたしました。今年も福山市と夕イアップして十一月十二日(日)に演能会を催します。曲目は「八島」の予定です。

　この曲は福山の初代藩主水野勝成公が好んで舞われたものですし、瀬戸内が舞台になっていますので、選びました。

　普及活動としては、小学校の体験学習で、娘の衣恵たちが謡や仕舞の指導に行っています。地元の小学生たちは熱心ですから、とても賑やかですよ。

三浦　生徒さんたちのために袴を作られたとか。

大島　ごく簡単な稽古袴ですが、袴を着用すると気分が引き締まりますからね。

三浦　発表会はどうなさるのですか。

大島　プロの演能の前に、能学習発表として、生徒たちの発表を行います。彼らにとって地元の重文の舞台に立つことは、生涯の大切な思い出になると思います。

　地元の方々も着付けを手伝ってくださったり、いろいろご協力くださいます。

三浦　地元の協力があってこそできることですね。さまざまなご意見があるでしょうから、調整するのが大変でしょうが。

大島　そうですね。

三浦　岡山の後楽園能舞台でも演じていらっしゃいますね。

喜多流定例鑑賞能200回記念
「絵馬・女体」大島政允(H17. 2. 17)
喜多流大島能楽堂（撮／池上嘉治）

大島　例年十一月三日、文化の日に、観世流の方と一年交替で行っています。

三浦　ここの能舞台は新しいのではありませんか。

大島　昭和三十三年にできたと思います。

三浦　見所は、どうなっているのですか。

大島　舞台と見所は中庭を挟んだ形で、舞台・見所とも半分が屋外なんですよ。

三浦　雨天でも大丈夫なのですか。

大島　ええ、大丈夫です。あまり天気が良すぎると陽射しが舞台に入ってしまいますので、曇り空くらいがちょうどいいですね。

三浦　広島には厳島神社能舞台とアステールプラザ能舞台、そして喜多流大島能楽堂がありますし、意外と言うと語弊がありますが、中国地方には能舞台が多いですね。

大島　とても雰囲気の良い舞台が多いですよ。

三浦　平成十二年から『能おおしま草紙』という情報誌を発行なさっています。これも、普及活動の一環と考えてよいものですね。

大島　そうですね。現在十三号まで発行しました。またホームページも開いています。

三浦　ホームページ上に大島家の皆様が写真付きで紹介されていますが、プロデューサー役の奥様の写真が打ち出の小槌を持った招き猫のイラストになっています。猫好きの私としては、このセンスが大好きです。

後継者のこと

三浦　お子様たちのことをうかがいましょうか。

大島　長男に輝久がいます。東京に来て何年になるのかな……、今、三十歳だから、もう十二年が過ぎましたね。

三浦　昭和五十一年生まれで、もうご結婚もなされましたね。

大島　この五月二十九日に女子の孫が生まれました。

三浦　おめでとうございます。いよいよお祖父ちゃんですか(笑)。

大島　(笑)、そういうことになります。

三浦　今は青年喜多会で活躍されていますね。

大島　先輩方に引き立てていただいています。催しも多いので、地謡に出る機会も多いようです。

三浦　輝久さんは東京と福山の両方でお舞台をつとめられているのでしょうか。

大島　そうですね。福山の定期能は平成十年からつとめています。

三浦　そろそろ「道成寺」の準備に入る時期なのではないですか。

大島　さあ、どうなのでしょうかね。佐々木多門君が来年の秋に「道成寺」を披くはずです。「猩々乱」は去年東京で披きました。

三浦　ここでご長女の衣恵さんのお話に移りたいと思います。衣恵さんは喜多流で初めての女性の能楽協会員ということですね。いつ協会員になられたのでしょうか。

大島　平成十年です。

三浦　衣恵さんと三女の紀恵さんが東京芸術大学卒、次女の文恵さんが武蔵野女子大学(現・武蔵野大学)卒と、私とは何かご縁が深い気がしています。とても魅力的なお嬢さんたちですね。

大島　ありがとうございます(笑)。しかし、能楽の世界では女性の限界というのがあるのだなと思って、どうしたらいいのかと考えますが、なかなかいい案が浮かびません。何とか機会を作って舞わせたいとは思っています。

三浦　女性が能楽師を志すなんて想定外だったのではないでしょうか。

大島　私も最初は考えていなかったのですけれども、衣恵にとっては芸大に行ったことが大きかったのですかね。自分もなれるものならと思ったのでしょう。

三浦　卒業の年に横浜能楽堂で舞った「杜若」を、久見先生がそれはそれは嬉しそうに見ていらして。後見のはずがあちこちから写真を写されていたのをよく覚えています(笑)。普段は大変厳格な方でいらっしゃったのでしょうに。

　今年の四月に梅若能楽学院で開かれた「第五回　緑桜会・こころみの会」で、主催者でいらっしゃる観世流の山村庸子さんによる仕舞「清経・クセ」と、衣恵さんの「清経・クセ」を拝見しましたが、流儀・流派で志向している美意識の違いの一端を見ることができたように思えて、とても面白かったです。最初に小田幸子先生の講演「流儀の伝えるもの・人の伝えるもの」がありましたし。

大島　そうですか。

海外公演について

三浦　政允先生は海外公演に関しても、熱心に取り組んでいらっしゃいますね。

大島　松井彬君の海外公演に同行してあちこちに行きました。その他、平成十二年には台湾、十四年にはブルガリア、十五年にはベト

ナムに行きました。次の予定が具体的に決まっているわけではありませんが、また台湾やベトナムで演能ができるといいなと思っています。台湾では台北にある台湾国立芸術学院の講師として、一ケ月ほど三十人の学生を息子たちと手分けして教えました。学生には袴能をさせて、プロによる公演では「黒塚」「羽衣」を新能で演じました。

三浦 学生さんたちは何を演じたのですか。

大島 「猩々」でしたが、皆、芸術を専攻している学生たちで大変熱心でした。同行してくれました父は学生たちの発表に感動して涙ぐんでいました。

その時の学生二名が我が家にホームステイして、現在、ひとりは東京で専門学校に、ひとりは広島大学大学院で勉強しています。

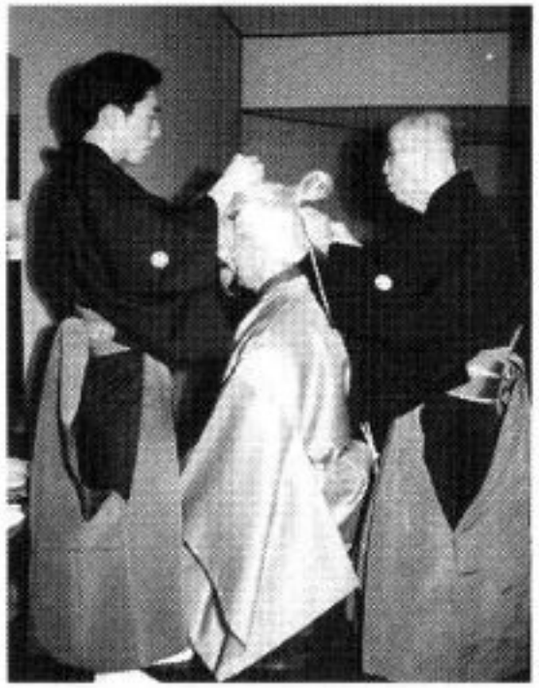
ブルガリアのカザンラクは、福山とバラを通じての交流がありまして、その五周年記念に、ソフィアとカザンラクの二都市のホールで公演しました。この時、十四世六平太記念財団の園田天光光さん（現・理事長）もご一緒してくださいました。

三浦 ベトナムでは本格的に能を上演されたのですか。

大島 そうです。日本の文化庁海外交流支援事業として、日越外交関係樹立三十周年記念の喜多流「能」訪越公演の団長としてまいりました。

三浦 上演した都市はどちらですか。

大島 ハノイとラエで、「船弁慶」「小鍛冶」を、私と狩野秀鵬君、香川靖嗣君たちとでしました。



大島家三代（久見・政允・輝久）楽屋風景（H8.6.16）

三浦 ベトナムでの反応はいかがでしたか。

大島 王宮前の広場で薪能ふうに上演したのですが、皆さんとても喜んでくれました。

三浦 舞台も本格的に組んだのでしょうか。

大島 そうです。日本から薪能用の部材を運びましてね。舞台監督として水戸芸術館の小坂部恵次さんが同行してくれて、立派な舞台を設営してくださったんです。各都市で二日間上演しました。

三浦 それは大変贅沢なことですね。

新作能「乙姫」

三浦 今年度のご予定は他にありますか。

大島 秋に「乙姫」という新作能を上演します。これは太宰治の『お伽草子』の「浦島さん」を原作とするものです。私が東京在住時代に稽古をつけていた守家輝信君、この方は芸名を梅屋福太郎とおっしゃる邦楽の囃子の方です。その守家さんが『お伽草子』から新作舞踊を作りまして、一昨年は「カチカチ山」を、今年は「浦島」を作ったのですが、これを今度、能に仕立てるのです。

浦島太郎を題材とした舞踊曲には坪内逍遥の「新曲浦島」がありますね。これと新作舞踊の「浦島」と、新作能「乙姫」を一緒にやろうという企画がまとまって、九月二十七日（水）に国立能楽堂で上演することが決まりまして、今、その準備に取りかかっています。

三浦 お忙しいですね。

大島 節付はだいたいできましたが、細部はまだできていません。

三浦 すべて政允先生の節付ですか。

大島 長田驍君に手伝っていただきました。彼は囃子に詳しいものだから。その通りにやるかどうかは、まだ決まっておりませんが。

三浦 狂言にも「浦島」がありますし、今、丸岡圭一さんが『古今謡曲解題』を見てくださって、番外曲の能「浦島」もあると教えてくださいました。

大島 野村小三郎さんが国立能楽堂でなさった狂言「浦島」はビデオで拝見しました。

三浦 新作能「鞆のむろの木」の初演は東京でしたが、今回もそういう形ですか。

大島 主催の守家さんが東京の方ですので。

配役は、乙姫と浦島が出るのですが、浦島は輝久にさせまして、乙姫を私がいたします。おワキが作者の太宰治の役で（笑）、宝生欣哉さんです。

三浦 面白そうですね。

大島 そして亀が出てきましてね。亀はお狂言方で野村万蔵さんにお願いしました。今度は舞踊との比較もできるので、いろいろと楽しみが広がるかと思います。

三浦 そうですね。しかし、練習を重ねるとなると、福山と東京とでしなければならないでしょうから、なかなか大変でしょう。

大島 そうなんですよ、皆さん、お忙しい方ばかりですからね（笑）。七月に稽古能をいたしまして、問題点が出てくれば直していこうと計画しています。

三浦 そういう面で、先生はマネージャー的なお役目もしなければいけないわけですね。

大島 節付を頼んだ長田君が三重在住なので、笛と大鼓は名古屋の方をお願いすることにしました。笛の大野誠さん、大鼓の筧鉱一さんです。そして、小鼓が幸清次郎さん、太鼓は守家君のお子さんが習っている小寺真佐人君に頼みました。

三浦 地謡は。

大島 出雲康雅、大村定、長島茂、狩野了一、金子敬一郎、友枝雄人、内田成信、佐々木多門の皆さんです。

三浦 喜多流では新作を上演する場合に、何か手続きが必要なのでしょうか。

大島 はい、職分会に報告します。

三浦 新作能ですと、面・装束の選択がひとつの楽しみになると思いますが、竜宮城のイメージで選ばれるのでしょうか。

大島 そうです（笑）。天冠をつけて……「楊貴妃」のようになりますかね。

三浦 亀の役は、頭に亀を載せるのですか。

大島 そうですね。亀の役は、前場・後場の両方に出てもらいます。前場は年老いた亀が、後場は若い亀になってもらおうと、いろいろと無理を言っています。シテの浦島太郎は、前場では昔のことを再現しますから若くなって、だから亀も若い亀になるのです。

太宰の「浦島さん」は昔話の「浦島太郎」とは少し違って、シニカルな雰囲気がただよっています。

三浦 そんなところも生かすのですか。

大島 どこまで生かせますか（笑）。「聖諦（せいてい）」というのが主題ですので、「聖諦ノ舞」というのを考えているのですよ。

三浦 それは新しい舞なのですか。

大島 いえ、いわゆる普通の舞事とはちょっと変えようかとは思っていますが、乙姫と浦島が途中から相舞になるぐらいしか決まっていません。

三浦 面白そうですね。

本日はお忙しいところ、いろいろとお話しくださり、ありがとうございました。ますますのご活躍を楽しみにしています。

H18/07/01 能楽タイムズ
第652号

back